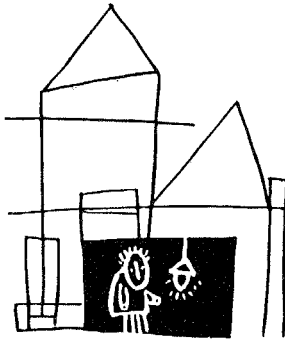


## 図書室月報

2022年(令和4年)9月5日

第712号

〈図書室のつどい 参加者の感想〉



よしかわけいすけ著

『高校教師、  
住まいを捨てる。』に参加して

高遠 敬子

モノにあふれた私の部屋を見る度に、いつか片付けよう、そのうちに絶対……そう思ってた何年も経つ。そんなある日、『高校教師、住まいを捨てる。』の講座のチラシに、目が釘付け！そんなことが出来るのか？ぜひ話を聞きたいと思い講座に参加した。

講座のテーマは、物を持たない新しいライフスタイルについての理解を深めること、その考えが日常生活や仕事、挑戦する力につながる、である。

さて、「ミニマリストとは何？」と問われ、私は「物が少ない人」と思ったが、「物質的な物に執着せず、自分の部屋を人生で大切なモノで埋め尽くす」という考え方だと知りハッとさせられた。好きなモノで埋め尽くす！さらにアドレスホッパーとは、家を持たずに旅をする人だと思ったが、実際には、仕事をしながら各地を転々とする人達のことだと分かり、価値観の多様性を感じた。テクノロジーの進化により、場所を選ばずともPCがあれば仕事ができ、月額料金を支払えば、音楽や家具、テレビなど様々な物を共有できるといったことができる世の中になったのだ。

よしかわさんがモノを捨てたきっかけは、たくさんさんの持ち物に囲まれて、いつも探し物をしたり掃除が面倒だったりして、居心地が悪くなっていたことだった。仕事は高校教員、サッカー部の顧問で、平日は朝7時〜20時、休日は部活動、年間の休日はたったの5日といった状態で、モノが片付かず悪循環になっていた。そこで一度持ち物を捨てる！と思って処分すると、必要だと思っていたモノが、実はなくても困らないことだと気づき、

教材や資料などもデータ化し、本も手元に置いておくだけになると、どんどん家が片付き、最終的には自転車とリュック2つだけとなった。

アドレスホッパーとなったきっかけは、海外旅行先で出会ったフランス人の青年が、仕事をしながら旅をしていることを知り、驚いたこと。旅は非日常で面白い。日常はつまらない。ならば日常を非日常にしてしまおうことができないか。国外が無理なら国内で。よしかわさんの住む石川県は、ちようど海外旅行者が多く来るための宿泊施設の建築ラッシュ。金沢を中心に100を超えるゲストハウスがあつたため、各地を転々とするようになり、そこで多くの旅行者と交流し刺激的な毎日を送った。

この噂を聞きつけた石川県の不動産王が、人々に発信することを勧め、ブログに掲載すると、たちまち大反響！ニュースや新聞、さらに韓国にまで紹介されて、この勢いは止まらず、本を出版するに至った。

モノを所有せず、住所もないと、一体何が生まれるのか？私は、よしかわさんの話を聞いて、「自分を生きる」ことだと強く感じた。自分が生きる上で必要な道具を見極め、人生の旅路に行く。様々な価値観を持った人々と出会い、語らい、経験し、自分を知っていく。今もモノに溢れていたから、決して見えなかった風景だったと思う。そう思うと、私も「自分が本当にやりたいことは何か」を考え、モノと向き合い、友と語らい、夢を形にできるよう、新たな人生を踏み出したいと感じた。

(河出書房新社)

ブッククラブから

# 水上勉著 『雁の寺』

清水佳子

最初から最後まで、しつとりと暗くもの哀しい雰囲気のもの語である。

岸本南嶽が描いた襖絵のある禅寺孤峯庵で、和尚の慈海と少年僧慈念、和尚の愛人里子は暮らしている。主人公慈念は、乞食女が生んだ捨て子で、軀は小さく頭だけ異様に大きく奇形のようなのだが、頭脳明晰で黙々と修行に打ち込んでいる。多くを語らない人柄に圧倒的な存在感がある。里子は、慈念になじめないものを感じながらも少しずつ親しんでいく。

母を知らない慈念は母を恋しく思っているのだろう。ところが慈念の身近な女性である里子は、母的である前に女であり、和尚の愛人である。ある夜、慈念は和尚を殺害する。慈念は淡々と完全犯罪を成し遂げるも、慈念の鬱屈も孤独も何も解決しないまま物語は結末となる。

鬱積した怨念を持っているだろう慈念の心理描写がないことが、彼の不気味さを際立たせている。読んでいて彼が何をどこまで考えているのかわからないのが怖い。慈念が内心に抱え込み、増大し続けた孤独や鬱屈が、鯉や鳶のエピソードでかすかに感じられるものは、明確なつながりや意味づけが読み取れるほどでは

ないように思う。関連性を読み取れないエピソードの重なりが真実味を増すのだろうか。いつの間に殺人にまで至るほどのものを抱えていたのか。慈念は何を考へ、どんな気持ちだったのだろうか。暗い雰囲気の中に通底している儚い美しさを味わいながら、物語の世界に引き込まれる。

講師の大木志門先生の解説は非常に詳細で、水上勉の波乱万丈の経歴とともに、水上勉が一人の人間として職業作家として、推理小説から脱却して「人間」を書きたいともがいていた苦悩が感じられた。特に「和尚殺しの場面をどうしても書けず、新宿のバーに逃げ、バーまで追いかけてきた編集者に『もう表紙に推理小説と刷り込んで』と説得されて一晩でなんとか書き上げた」という逸話は面白かった。確かに、慈海殺しの場面はそこだけ取って付けたようにかけ足であり、参加者からも死体隠しのトリックとしてはどうなのだろうという声があった。

貧しい生い立ちで、水上自身が幼少期に口減らしのため寺に預けられており、作者の小僧時代の体験が投影されていることであった。禅寺の用語やしきたりにはさりげなくも臨場感がある。



美しいだけでなく、悲しいものも、醜いものも含めて全てが物語の背景になっているところが魅力である。少年僧慈念の鬱積した孤独な怨念のやるせなさは、私には分かりようもない。分かりようもないかもしれないが、慈念に象徴される深い暗さ、深い闇のような気持ちには私の中にも確かにある。そのことに気づいたとき、やるせなさで、慈念が無性に愛しく思えた。孤独や情念が渦巻く中、最後に雁の襖絵が浮かび上がるのが、美しく悲しい。

(新潮文庫)

## くにたちブッククラブ

— 感傷から遠く離れて —

宇佐見りん 『かか』 (河出文庫)

講師 内藤 千珠子  
(大妻女子大学・近現代日本語文学)

とき 9月8日 (木)  
夜7時半～9時半

ところ 公民館 地下ホール  
申込先 公民館 ☎(572)5141



\*次回は10月13日(木)  
田中康夫  
『33年後のなんとなく、  
クリスタル』  
(河出文庫)です。

新着図書から

〈総記〉 オッサンの壁 佐藤千矢子 (講談社) 070	〈歴史〉 第一次世界大戦と民間人 鍋谷郁太郎・編 (錦正社) サンマデモクラシー 山里孫存 (イースト・プレス) 東京ハイキング案内 (山と溪谷社) 田辺のたのしみ 甲斐みのり (mille books) 291 291 219 209	〈社会科学〉 台湾を知るための72章 赤松美和子・編著 (明石書店) リスクを生きたる 内田樹 (朝日新聞出版) みんなの政治学 木下ちがや (法律文化社) ウトロ・強制立ち退きとの闘い 斎藤正樹 (東信堂) 台湾同性婚法の誕生 鈴木賢 (日本評論社) 社会的連帯経済 藤井敦史・編著 (彩流社) 東京の部落解放運動100年の歩み 部落解放同盟東京都連合会・編 (解放出版社) つながり過ぎないでいい 尹雄大 (亜紀書房) 外国人労働相談最前線 今野晴貴 (岩波書店) 10年目の手記 瀬尾夏美 (生きのびるブックス) 「障害」ある人の「きょうだい」としての私 藤木和子 (岩波書店) 369 366 361 361 331 324 316 311 304 302	とりのりのハト 柴田佳秀 (山と溪谷社) 488	〈工業〉 いきもの六法 中島慶二・監修 (山と溪谷社) 戦争と科学者 安斎育郎 (かもがわ出版) 559 519	〈芸術〉 鳥獣戯画研究の最前線 土屋貴裕・編著 (東京美術) 音楽と戦争のロンド 劉美蓮 (集広舎) シヨットとは何か 蓮實重彦 (講談社) 778 762 721	〈言語〉 複数の言語で生きて死ぬ 山本冴里・編 (くろしお出版) てんまる 山口謠司 (PHP研究所) 811 804	〈文学〉 マイクロスパイ・アンサンブル 伊坂幸太郎 (幻冬舎) 幸村を討て 今村翔吾 (中央公論新社) くるまの娘 宇佐見りん (河出書房新社) 幸田文生きかた指南 幸田文 (平凡社) Nさんの机で 佐伯一麦 (田畑書店) 夏の体温 瀬尾まいこ (双葉社) 私解説 瀬戸内寂聴 (新潮社) カタコトのうわごと 多和田葉子 (青土社) 猫に教わる 南木佳士 (文藝春秋) マスカレード・ゲーム 東野圭吾 (集英社) 英訳された日本文学を読む 野間正二 (文理閣) 壁とともに生きる ヤマザキマリ (NHK出版) 三浦綾子論 小田島本有 (柏艱舎) ピリカチカッポ 石村博子 (岩波書店) すべての月、すべての年ルシア・ベルリン (講談社) もうやってらんない カイリー・リード (早川書房) 赤毛のアンから黒髪のエミリーへ 赤松佳子 (御茶の水書房) 930
--------------------------------------	---	--	--------------------------------	---	--	---	--

図書室のしぐさ

裁判官のしぐさ

お話 門口正人 (元名古屋高等裁判所長官)

裁判官として所長や長官を歴任された門口さんは、かつて「余分なものは書くべきではない」と諭され、書くものといえば裁判関係文書ばかりだったそうです。裁判官退官後は弁護士となり、多数の実務書や一般書を上梓されています。なかでも本書は、長年の裁判官経験を硬軟織り交ぜた語り口でまとめたエッセイ集です。門口さんのお話から、私たちがふだん知る機会のない裁判官の「横顔」に触れてみませんか。

〈門口さんからのメッセージ〉

これまでも、身近な裁判所、分かりやすい裁判を目指したお話をしてきましたが、公民館からお声をかけられるのは初めてで正直驚きました。折角の機会ですから、裁判所の数居は高い、裁判は分かりにくい、裁判官は何を考えているのだろうかといった不満や疑問が少しでも解消されるようなお話ができればと願っています。

〈門口さんの本〉表題作(法曹会)、『裁判官 フランスを歩く』フランスの社会・司法事情(青木書院)ほか

とき 9月17日(土)

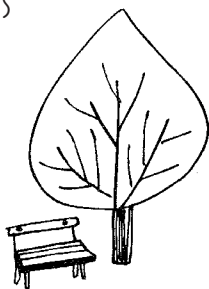
昼2時〜4時

ところ 公民館 地下ホール

定員 40名(申込先着順)

申込 9月7日(水)朝9時〜

公民館 ☎(572)5141



図書室のしらす

# 目の見えない白鳥さんと アートを見にいこう

お話

川内 有緒かわうち ありお (ノンフィクション作家)  
白鳥 建二しろとり けんじ (全盲の美術鑑賞者・写真家)

「なにが見えるか教えてください」白鳥さんのその一言で美術鑑賞が始まります。

白鳥さんは全盲の美術鑑賞者で、年に何十回も美術館に足を運びます。著者の川内さんは、友人の紹介から白鳥さんと出会い、ともに各地の美術館等を巡るようになりました。初めは、目が見えない人が美術作品を「見る」とはどういうことなんだろう、と思う川内さんでしたが、一緒に鑑賞しながら会話を重ねていく中で、多くの新たな気づきを得ていったそうです。アートのこと、生きること、社会のこと、しょうがいを持つということ……ともにアートを鑑賞するということを通して、見えてきたことについて、お二人にお話しいたします。

〈川内さんの本〉表題作 (集英社インターナショナル)、『パウルを探して 完全版』(三輪舎)、『空をゆく巨人』(集英社)ほか

とき 10月21日(金)  
夜7時〜9時

ところ 公民館 地下ホール

定員 40名(申込先着順)

申込 9月16日(金)朝9時〜

公民館 ☎(5)72(5)141



〈私の本棚から 第6回〉

ドミニック・ローホー著

『シンプルに生きる』

変哲のないものに  
喜びをみつけ、味わう』

上原真弓



私は、本を購入して読んだらよほどでない限りとっておきません。図書館で借りられるものは借りて読み、購入したもののほとんどは読んですぐにセカンドハンドへ出します。本棚にある本は常に30冊程度です。

その中でも最後に紹介させていただく本は、10年以上本棚に居続けています。旅行などにも持っていくので、本の角がボロボロになってしまいましたが、短い本で、写真も挿絵もあります。文章も簡潔。そのシンプルさが、かえって私の頭をフル回転させます。

著者のドミニック・ローホーさんは、本著で「限りなく少なく豊かに生きる、シンプルライフ」を提唱しました。限りなく少なく、というのはミニマリストと共通するところですが、ミニマリストはモノの量にこだわっており、そういった意味でモノをたくさん集めている人と同じなのだという論理にハッとしました。

シンプルライフがモノを減らすのは、モノ自体に縛られないためです。より自由になるために、減らすのです。そしてそのモノというのは、物質的な物だけでなく、人付き合いや所属する団体、はたまた宗教や考え方も含まれます。そうい

ったモノを一つ一つ減らすことにより自分自身にかけてられるエネルギーが増えます。そして今という時間にもっと向き合うことができ、その結果豊さを感じられるようになるということです。

最後に本書の中で心に残っている部分を抜粋します。

「自分を取り戻すための大切な場所 家は「自身」を守るためにあります(中略) シンプル主義を実践した住まいは、エネルギー、バイタリテ、バランス感覚、そして喜びを注入してくれるところであり、わたしたちのからだと精神の大きな後ろ盾になってくれます」。

自分の家が、単に肉体的な休息を与えるだけでなく、メンタルや哲学までも支え、自分を守ってくれるとは考えたことがありませんでした。この本を読んで家の持つそんな側面を伸ばしていきたいな、と思いました。

半年に渡って連載させていただいた「私の本棚から」も今回で最後です。6冊の本には、特に「家」や「生活」に関係するものを選ばせていただきました。この連載で紹介した本が、みなさんの後ろ盾になる家づくり・生活づくりのヒントになることを祈っています。

(幻冬社)

## 係から

毎回とおきの本を紹介していただいた上原さん、本当にありがとうございました。次回以降の「私の本棚から」もどうぞお楽しみに。

